

GR
白雲柳

とりお



48

埼玉 名栗

昭和55年6月15日

宗教法人
白雲山

鳥居観音

表紙の説明

白雲山、鳥居観音山門落慶式

昭和54年11月3日当山の山門が落慶、導師は曹持寺監院松浦老師によって執行、テープを切られたのは同老師と、当山開祖平沼先生のお二人です。参列者数百名、名栗梅花流の御詠歌行列もあって盛大でした。

とりゐ第48号目次

表紙	山門落慶式	一
風薫る恩重堂	……………	一
道光禪師御法話(其の三〇)	……………	二
観音行の實踐	……………	六
西遊記(其の四一)	岡部千三……………	九
田舎医者(其の二七)	見川鯛山……………	一二
鳥居観音だより	……………	一六
民俗茶ばなし	……………	二三
俳句	……………	二四
裏表紙	鳥居観音地図	
これからの行事		

風薫る恩重堂

昭和十五年、当山の本尊、聖観音が落慶開眼されたお堂が、奥の院、大黒殿(恩重堂)と改名されました。

昭和三十五年現在地に本堂が完成されたので、ご本尊を始め六観音を合祀して、一段と面目新たにになりました。それから上の堂を奥の院といいました。たまたま大黒様が完成しましたので、奥の院に、お祀りして、大黒殿と云って今日まで参拝いただいております。

大黒様は平沼先生の力作得意のもので、本堂に遷座し、観音様と共に拝んでいただくことがよいと云うので、本堂におうつししました。

本堂の奥に平沼先生のご両親の胸像が、祀られてあります。このご両親の胸像を大黒殿だった堂に、おうつしして、当山開創に深いお方のご恩を永久に伝え、法要等も盛んにする考えであります。

そして堂名は、開祖平沼先生ご夫妻がお考えになつて、恩重堂と命名されました。

文字は清水市の松田江畔先生に書いていただき、岡部博吉氏に檜木の板材に刻り上げてもらいました

恩重堂縁起

このお堂は当山の開祖平沼弥太郎氏が母の遺言によりこのお山に観音様をお祀りした最初の建物(本堂)です。

その後、亡母への報恩一途に仏像を刻み、堂塔を建立して、今日の鳥居観音に到りました。

このことは偏えに亡き両親の深い恩愛と加護によることとされ、ここにその霊牌を祀り、仏の説かれた「父母恩重経」から恩重堂と名づけました。

昭和五十五年五月吉日

鳥居観音

明けくれを恩重堂に風薫る



道光禪師
(故高階瓊仙猊下)
御法話

世間

(其の三〇)

自分は自分の直面している場で安心して稼業をはげみ、自己を有益に生かすことが必要であります。やたらに世間に目うつりして、妄想してはよろしくありません。よく世間にはなにごとをやっても懶巧なんだが、なにひとつ成功していない人がありますそれは自分の一心が定まらないからであります。「万能達して一心定まらず」といいますが、一心の定まりがないと、気うつりばかりして、何事も成功できません。丁度植木を扱うのに、ここに植えてみたら、あちらにやってみたらと、一本の木を植えかえばかりしているうちに、いじり枯らしてしまうようなもので、つまり心が安定してないからです。

人間もあせり廻るうちに、とうとう一定の根拠こゝろまじをつくり得ぬようなわけであります。

また、他人の口先に動かされて、あの人があいつにいたから、この人がこういったからといって、動かされているようでは、これもまた結局自分の成功はできません。よってまず自分の安定を十分ににして、自己の職業を守ることがあります。

つぎは第二に資産。これがまた交換材料には最も有力なものであります。文に、

「資産、資産とは金銀及び物品等の如き有形上、人生に必要なすべてのものをいう。是等のものは能く世間を益するを以て、之を有すること多からんことを要す。故に自ら刻苦勉強して勤儉の徳を積むべし。是亦本来空の活動なり。本来空の活動なるが故に、又時に臨んで能く之を散ずべし、世間の人は之に執着して散ずることを知らず、断空の徒は懶惰にして、強いて之を嫌忌すれども本来の活動を知らざる者にして取るに足らず」

とあります。すなわち財産は大いに、交換のため

に必要である。ゆえに自分がにぎり込んでしまったのでは、資産が死産になってしまう。よって大いに世間に生かす意味において、大いにたくわえる必要もあります。たとえば資産家が百万円の資本をおろして、大きな工場をつくる。そうすると、それによって労働者の生きる道が立つ。そうして互いに社会が助け合っていく、恵まれ合っていく。そういう意味において、殖産力のある者は、大いに蓄えるのがよいというのです。それが故に文に、

「本来空の活動なるがゆえに、又時に臨んで能く散ずべし。世間の人は之に執着して散ずることを知らず。」とあります。

それでは財の活動の生命をうしなつて、社会交易の意義をなしません。有財餓鬼におちいるだけのことです。

第三には地位であります。文に

「地位、地位も亦よく世間を益するものなり。故に勤勉刻苦して高等の地位を得、之に依つて人を益すべし。然れども強いて之を得んと欲して本来空の

本性を傷つくるは非なり。断空の徒山間に蟄居し、強て之を嫌忌するが如きは本来空の活動にあらざるなり」とあります。

たとえれば、村長よりも知事、知事よりも大臣とだんだん上になるほど、及ぼす力が広くなって、世間を益するものでありますから、その意味においてならば、大いに高等の地位を得ることに努めるがよろしい。

ただ、自己の名誉や利益のために、これを得ようとするならば、そこにはかえっているいろいろな不純が伴つて、世間を益するどころではなくかえつて害毒となるような結果を招きます。また、それと反対に「世間の中はいつでもよい。地位も名誉もいらん。どうかこうか生きていけばよい」というような者がおりますが、これもまた社会的人生の活動に遠ざかり、本来空の自在にそむくものだというものです。

それから第四が学問。文に、

「学問、学問は世間を益する大なるものなり。故に最も世間に必要なる学科を撰択して、螢雪の苦を

積み、其の蘊奥を究むべし。本来空の理を誤観して懶惰に光陰を逸することあるべからず」と、

この世の中には仮りの世界だからどうでもよいと惰けるのはいけません。ちょうど役者が舞台に立つたと同じことです。役者が舞台はマネゴトだから、どうでもよいというのでは、芸術としての生命をうしないます。仮りのことですが、そこに生きた精神を燃やしてこそ、はじめてその芸術が生きてきますゆえに決して一つの所作でも侮ってはいけません。人生も本来空だからとて、惰けては大乗的の人生の意義をあやまるものであります。ですから刻苦勉励し螢雪の苦を積んで、本来空のこの人生を、有意義に生かしていかなければなりません。

第五は、本文に

「第五は技術。技術も亦世間必要の具なり。故に学問と同じく之を修行せよ」

「第六は勞力。勞力も亦世間を益するものなり。

故によく之を養うべし」それから、

「第七に智識。

第八に經驗。智識及び經驗も亦世間を益する所以なり。故に之を得ることに心を用うべし。

第九に交際。広く世間に交わるときは自他の益多し。故に交際は人生必要の具なり。しかるに、本来空の理を知らざるものは人に於て愛憎を生じ、其の極世をいとい俗塵をさくると称して閑居自ら世をせまくす。此の如きは世間に於て益なし。世間に益なきを以て、世間に処して、無礙自在なることあたわざるなり」

右の内第六、七、八はいうまでもありません。第九について、広く世間と交わるには自己を捨ててかかることが必要です。自己を捨てれば、あの人は好き、この人は嫌いというへだてがとれます。清濁併せ呑む抱よう力ができて、自然に交際が広くなるのであります。しかるに自我の強い人は、強いほど狭量になって、人を容れる雅量にとほしいのであります。さて以上交易に関する実例を挙げて、つぎのようを書いております。

「右、列記の外苟も世間を益すべき事物は之を取

つて用うべし。人を益する所以のものなくして世間に処せんと欲するは無智の至りにして遂に世間より擯斥せらるべし。光陰人を待たず豈勉めざるべけんや」とこれは自分ではこの世間に立っていかうとしても、有形にせよ、無形にせよ、世間を益するだけの、交換材料を持つていなければ、意見を主張しても通る権威がありません。やはり自分が、大いに世間を益するところの力を貯えて、それから出発して、社会に交わるのでなければなりません。

つきは社交の上に要する大切な感情であります。

文に、

「感情とは事にふれて心意の発動するを云う。世間は概して六根五欲に住するを以て、常に之より来る感情のために支配せらるるものなり。故に世間に処して無礙自在ならんことを欲せば、世間の感情を観察し之に応じて活動するを要す。是れ亦本来空の活動なり」とあります。

第一が人格と品行とであります。

「人格は高尚にして野卑なるべからず。然れども

亦、本来空なるを以て強て是を装うは非なり。又自己の職業と自分に相応すべし」と。

これはいうまでもなく、人格は高尚に持たねばなりません。しかしそれは修養されて、自然にできた高尚でないと、高尚ぶろうと思つて強てやるのは、氣ざわりになつてかえつていけないものであります。だからこれは急にはいきませんから、若い時から心得て、常に人格をつくりあげることを、修養しなければなりません。つきに、

「品行は方正にして、廉直なるべし、然れどもこれ亦活動あるを要す。」とあります。

すなわち、品行は方正であるのがよいことは云うまでもありませんが、しかし袴を着て、扇をもつてかしまつていようなものも、世間が窮屈もおもしろくありません。「然れどもまた活動あるを要す」といつてありますから、緩和の自由がなければなりません。だから豆腐主義がよいと思ひます。

「浮世わたるは豆腐で渡れ、まめで、四角で、やわらかく。」

(以下次号)

観音行の実践

兵庫 兵庫 兵庫 兵庫

西正寺

光山

善雄

美しき合掌の姿、その時

つゞき

結婚に限らず、人間は初対面が大切です。初対面の心を忘れず交際をつづけて行くことです。甲の家を訪ねた時の庭の美しかったこと、そして美しい娘、やさしいお母さん、いろいろの御馳走等を思い出して心に深く感銘します。

人に出遇うということは尊いことで、米国のガリフォード夫人が私宅を訪問下さった時は、初対面でありましたが、観音さまのお使いのようにうつくしく、ここから親善運動が生れたものです。順境につけ、逆境につけ、日々新たに努力いたしたいものです。本日こうやって皆さまにお会いできることでも深い深いつながりがあればこそです。

時とは「転迷開悟」の時です。心眼を開くは今の

時です。「その時」の解釈はこれ位にして次にうつります。

無尽意菩薩は、その座より立ち上った。東京は地震の焦土より立ち上り、また戦災の中より立ち上り傷だらけの日本が立派に歩くようになったことは、国民の努力、精進が実ったからです。

無尽意菩薩は観音経の発起人であり、答えるお方は釈尊ですが、主演者は観音さまであります。

無尽意とは智慧が無尽にある菩薩ということで、われわれを代表して、自利利他行を実践するお方であります。

右の肩をはだぬくとは、一肩ぬいで社会のため、お国のために一生懸命に奉仕することです。

現今の政治家は国家に奉仕する精神が欠けているから種々の悪事が出てくるのでしよう。よろしくこの菩薩行を実践せねばなりません。

右の肩は智慧をあらわし、左の肩は禪定をあらわすと申しますから、智慧と禪定の融合が仏法です。

無尽意菩薩は印度式最敬礼の合掌をして釈尊に問

うています。仏とは釈尊のことです。合掌向仏とは
仏に向って手を合せて礼拝することです。

○ 「合掌とは「十界一如」、真理と一体になった姿が
合掌であります。開掌とは十界であります。

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、声聞、縁
覚、菩薩、仏……われわれの心の中に十界があり
ます。すなわち六凡四聖といい、開掌は差別相対の
世界で、合掌は一心絶対の平等の世界であります。
理想の合掌は凡・仏一如・機法一体で衆生と仏と
が一つになることを意味しています。

右の手を仏とし、左の手を凡夫として合掌すれば
凡夫一体となりましょう。事相の合掌は君臣一体、
夫婦一体と味わわれます。世界の人類が互いに拝
みあい両手を結んだら平和な幸福な世界が実現され
ましょう。東洋にも西洋にも合掌の姿のあることは
うつくしく尊いことです。

釈尊や各宗の宗祖が人から合掌されるのは学問や

お金の力でなく、全人類を抱き、限りなき大慈大悲
をもって信仰に導き合掌されたればこそ、人々より
合掌礼拝されるのです。

自らを灯とし、真理を灯とし、暗を破り光りを与
え、生命を与え下されたればこそ数千年後の今も、
礼拝されるのです。

梅原真隆師のお話に「嘆仏というは仰いで聖い仏
徳をほめたたえることであり、ざんげとは俯して罪
ふかいわが身をあやまりはてることである」とあり
ます。この二つの生き方によって私達の生活はおの
ずから浄められ、高められるのであります。

言葉をかえていえば嘆仏の心は「拝む手」となり
ざんげの心は「あやまる手」となります。

「両手を合して拝む」ことのできる人、両手をつ
いてあやまることのできる人は、どんな場合にも正
しく生き抜けるのであります。そして拝む手は……
「あやまる手となり、あやまる手は「拝む手」とな
ります。

嘆仏の生活は仏の聖徳をいよいよあざやかに仰が

れると共に、自分のあさましさが、いよいよ気づかされて、自らぞんげの心が深められるのであります。またぞんげの心に迫られて、ひざまずかず居られなくなる時、いよいよ仏徳がありがたく頂かれて、嘆仏の法悦がゆたかになるのであります。

私が仏と一つになるのでなく、仏が私と一つになって下さるから、自然に嘆仏の合掌、ぞんげの合掌となり、拝まずには居れない合掌の姿になるのです。「拝む手はあやまる手」「あやまる手は拝む手」なんと尊い味いではありませんか。

お金があつて喜ばれ、なくとも喜ばれ、「両手合して生くる」ことのできる人は、「無碍むげの一道」を歩む合掌の行者でありましょう。

朝は早く起きて「合掌」し、今日も仏と共に働きますと念じます。

「朝な朝な報仏の功德と共に起き」と古人も申されました。

夜は床につくや、今日も無事に働かせて頂きましたと合掌しながら反省し、心に汚れがあつたり、失

敗があつたら、ぞんげして改めましょう。

一日に三度の食事をとる時は頂きますと感謝し、食事が終つたら「御馳走さま」と合掌いたします。

健康であればこそ恵まれた仕事で、働くことができます。これこそ希望の合掌であります。

このよき日にある人は負傷し、また自殺し、ある人は病氣となり、死人を出して居る。様々な現象を見ると、それらを思えば心から感謝の合掌をささげずにはおられません。

○ 苦悩の解脱

「仏、無尽意菩薩に告げてのたまわく、善男子、若し無量百千万億の衆生有りて諸の苦悩を受けんに是の観世音菩薩を聞いて、一心に名なを称なえば、観世音菩薩、即時に其の音声を観じて、皆解脱することを得せしめん」

大阪や東京の駅の混雑する人を見て、人間の多いのにおどろきます。ようもこんなには：（以下次号）



西遊記

(其の四一)
岡部千三

正しょう

体たい

つづき

「なんとうるさいさるだ。もうがまんできない」
とうとう、賽太歳さいたいさいは門をでた。

「孫悟空、いくらわめいても金聖宮はかえしてやらぬぞ。ぶじなうちにはやくもどれ。もどらぬと、火だぞ。煙だぞ。砂だぞ。三つのすずのおそろしさは、よく知っているはずだったな。」

賽太歳は、火をだして悟空をおいはらおうとしたところが、すずをだしてみると、どうもおかしいすこしちがったところがある。それもそのはずである。ほんもののすずは、悟空が持っていたからで、ちがうわけだ。賽太歳のものは、悟空の毛でこしらえた、にせものなのであった。

「やっ、これは。」とおどろく賽太歳を、悟空はあ

ざわらった。

「はっはっ。」いまごろ気づいたか。おまえのすずはここにある。このまぬけめ……。」

三つの宝のすずをだして、シャラシャラとふりならすと、火とけむりと砂が、いちどにどつとふきだして、天も地も、もえあがるようないきおいだった。賽太歳は、そのうちにげばをうしななって、あっちへうろうろ、こっちへまごまご、もうすこしで、からだに火がもえうつりそうになってきた。

そのとき、空から、すがすがしい声が、……

「孫悟空」とよんだ。

悟空が、すぐ空を仰いで見ると、観音さまが、しずしずとくだってきて、火に水をかけているのである。

「おお、これは観音さま。どちらへおいでです」と悟空は、地に手をつけて、きいた。

「人をさわがすばけものを、たいじするためにならねえのだ。」

「では、うかがいます。賽太歳とは何者ですか」

「あれは、おおかみで、もと、わたしが飼っていたものだが、くさりをかみ切つてにげ、地上へおりてあばれまわっていたのだ、わたしが来たからにはもうあばれさせぬ。南海へつれてもどろう。」

観音さまは、悟空から、宝のすずをうけとつて、賽太歳の首にかけた。すると、見るまに、賽太歳はおおかみに早変わり、観音さまにつれられて、南海へとんで行つてしまつた。

悟空は、ほら穴から金聖宮をたすけだした。

「さあ、朱紫国へかえるのです。これへおのりください。」

そのへんにはえている草をたばねて、大きな竜の形をつくつた。

「さあとびあがりですから、ちょっと目をつむつていてください。それっ。」

じゅもんをとなえると、草の竜は、からだをくねらして、大空の中にまいあがつていった。まもなく朱紫国の城へついた金聖宮は、目をぱちくりさせていった。

「まるでゆめのようですわ。」

国王のよろこびは、いうまでもなかった。

その夜、城では、おいわいの酒もりがひらかれ、法師、悟空、八戒、悟浄が客によばれた。

のめやうたえの、大きわざである。そして夜おそくまで、つづいた。城にはあかあかとあかりががやき、にぎやかな声が、城の外までひびいていた。

女 七 人

朱紫国の城でゆつくりと、やすんだ法師たちは、げんきを取りもどして、また、天竺へむかつて旅をつづけた。けれども、くいしん坊の八戒は、あまり行かぬうちに、

「おししようさま、どういうわけで、こんなに腹がへるのでしょうね。」と、きまりわるそうな顔でいでした。

春の日がくれかけて、一日のつかれがそろそろでるころだった。

「八戒、お前の腹は、いつもたべものがはいつて

いないといけないのだね。よろしい。いつも悟空にばかり行ってもらっているから、きょうはわたしが行って人家を見つけ、たべものを、もらってきたましよう。」と、法師は、わらいながらいった。

「もうしわけありません。」と、八戒はいった。

「おまえたち、ここにやすんでいなさい。」といつて、家のありそうな方向へ、法師ただ一人すすんで行った。

しばらく歩いて行くと、一軒の大きな家があった中には、女ばかりが七人いたので、法師は、ちょっとためらったが、しかし、他に家もなさそうなので門の中へはいつて、たべものをわけてもらいたいといねいにたのむのであった。

「おや、これはお坊さま、さあさあ、どうぞおはいりください。わたしたちは、旅のお坊さまには、いつもしんせつにしてあげていますよ。さあどうぞ。」

女たちは、法師にむかって、あいそうよくいった「では、ごめん。」と、法師はほっとして家へはい

って、びっくりした。

ぞっとするような、へんな気持になったからである。石のテーブル、石のこしかけ、それらがつめたそうにならんで光っている。その上をひんやりとした風が、すうっと吹いていたからである。

「ただの家ではないようだ、ことによると、あやしいもののすみ家ではないか。」

こう思って立っているところへ、女たちがたべものを盛った皿まをはこんできた。法師はそれをひとめ見ただけで、ぞっとしたのである。皿のごちそうはどれもこれも、肉ばかりである。赤い血ちがにじんでなまぐさいにおいがした。

「せつかくですが、そのようなものは、ただけません。ごらんのとおり、わたしは出家です。生きものの肉はたべられません。」と手をふって、ことわった。

女たちは、からからとわらった。

「たべられないことがあるものですか。わたしたちのしんせつを、むだに……おつもりですか」(以下次号)



田舎医者 (其の二十七)

見川 鯛山

檻

つづく

父ちゃんはずれるように倒れていった彼女を見て、鉄砲を道端に投げだし、夢中で母ちゃんを抱いた。

「どうしたしっかりしろ!! 母ちゃん、オイ、母ちゃん、母アちゃん!!」

叫びながら彼女をゆさぶると、母ちゃんの虚脱した顔が、大きな口をあけつばなしでガタガタとゆれた。私も慌てて彼女の太い腕を掴み、その脈をみだが、馬のように強い正常な脈膊であった。閉じた瞼をひっくり返すと、母ちゃんのおつかない大きな目玉が、ギョロと私を睨みつけているので、私はなんだか気持が悪く、そっぽを向いてもじもじしてたら傍で父ちゃんが怒鳴った。

「あんた、医者のかせになにばやばやしてるだね!! 早くなんとか手当して、ちゅ、注射でも薬でも早えとこなんとか、なんねえもんなのか!! は、早くしねえと死んじゃうでねえか……」

と、もう、泣き声で私の袖を引っぱるのだ。「大丈夫だぞこんなの。吃驚して気絶しただけじゃないか、このまま、こうやっておけば、間もなく気がつくんだ。」

すると、父ちゃんがむきになって。

「なんだと!! このままほったらかしておく気かあんたは? 注射もぶたねえでターダじつと突っ立つてる心算か!! あんたそれでも医者か、俺げの母ちゃん死んじゃってもいいっちゅのか!! サ、なんでもいいから注射ぶつてくれ、どんどんぶつてやっ

てくれ、なんぼ高え注射でもかまアねえだ、サ早く!!

と、私の靴をもぎ取って、彼は勝手に中をひっかけ廻すのだ。

「だってあんた、ほんとにそんなことする必要ないんだぞ。注射もなにも、いらぬんだ」

私が父ちゃんから靴をひったくると、彼が怨めしそうに私を見て、泣き出しながら言った。

「なんて薄情なんだあんたは……俺の母ちゃん死にかかっているのに、見殺しにする気か。ナそうだべ、あんたは?」

父ちゃんその目つきがあんまり気の毒で、私はカンフルを一本注射した。だが母ちゃんはグニャグニャしたまま、まだ意識が出なかった。

「たった一本ぎりか? それっぽっちじゃ効きやしねえだ。でも、もういいだ。もうあんたにア頼まねっ!!

俺、町の病院サ連れてく。俺、大いそぎで自動車めつけてくっから、せめて病院さ着くまで、あんた

一緒にいろ、いいな? サ、母ちゃん、聞こえつか? もう少しの辛抱だぞ、死ぬでねえど母ちゃん!! 「この豪傑が、このくらいで死んだりするもんかなあお前たち?」

と私が犬に話しかけたら、二匹の犬はお互いに尻の匂いを嗅きまわって、こっちのさわぎには興味がないようだった。

間もなく、もうもうと土埃をあげて、自動車が走ってきた。だんだん近づいてくると、その自動車は犬殺しのトラックだった。

「そこだ、停めてくれ!!」

助手台から体をのりだして、父ちゃんが怒鳴った皮肉といえは皮肉だが、この火急の間に合う一番手近な奴は、これ一台だけだったらしい。それに、このトラックは病人を運ぶにふさわしく、寝わらがいっぱい敷いてあった。

犬殺しと私で、気絶した母ちゃんを、その大きな檻の中へ放りこんだら、父ちゃんが土方の親方みたいに怒鳴った。

「そつとやれそつと!! 材木じゃねえぞ」

母ちゃんと一緒にのりこんだ金網の檻は、かなり犬臭かったが、大好きな私は犬屋の店先へ入ったみたいで楽しかった。準備が出来ると、父ちゃんが、また号令をかけた。

「さ、いいぞ、出発!!」

「O、K」

犬殺しが英語で返事して、エンジンをかけた。さつきまで、母ちゃんとけんかしていたこの犬殺しはもうすっかり機嫌がいいのだ、余程ひとのいい男にちがいない。トラックが走りだすと、金網の檻ががつさがつさとゆれて、犬のねわらと一緒に、私達があつちこつちへ跳ねた。

「こんなに、ゆれて、大丈夫だべか? 病院さ、着くまで、まさか、死にや、しねえべな? あんたしつかり、脈みてて、くれ」

小刻みに跳ねながら父ちゃんが訊いたが、私の首も、ガクガクとうなずきっぱなしだった。

……
やがてこのトラックは町へ入り、病院の

玄関へ横づけになるだろう。するとあの太つちの院長が、金網の中の私を見つけて、必ず奴はこう言うだろう。

「オヤ、これはこれは見川先生。ずいぶんおめずらしいお車で、これはようこそ」……………

と、そんなことをさつきから考えながら、私は金網のすみっこの方にうずくまっつて、ムササビのようにふくれつ面をしているのだった。

県道へ出ると、犬殺しが急にスピードを出した。ひとしきりトラックがでこぼこ道を大きくバウンドして、檻の中の私達は猿のようにね廻った。そしてその震動で母ちゃんが意識をとり戻した。

「ここアどこだ。いま俺、なにしてるだ?」

と、キョトキョトしている母ちゃんの顔へ、父ちゃんがうれし泣きの頬をすりよせると、そのほっぺたを彼女が引っかいて言った。

「なにするだ、この助平オヤジめ!!」

そして、母ちゃんは私に訊いた。

「先生、これなんとした訳だ? 鳥小屋みてえな

この金網アいったい何だ？ あれ、これア犬殺しの自動車でねえのか？ なんして俺達アここさのつかつてるだ？ まさか、クロの代りに俺達とっ掴めえて、犬の牢屋さぶち込む算段じゃあんめ？」

と、母ちゃんの頭が再び混乱し出すと、

「畜生、俺こと掴めえてどうする気だ!! サ、車から下ろせ。停めろ、停めろ!!」

と、金網にぶら下ってゴリラのように吠えた。私は運転台をうしろからたいて、合図を送り、トラックを停め、こうなった訳を母ちゃんに話した。

「まったく、この糞オヤジめが、することなすことがみんな間がぬけてるだ!!」

と、父ちゃんへ怒鳴りつけ、彼女はさっさと先へ歩いていった。するとそのあとから、父ちゃんがこっさり私にいった。

「見てくれ先生、もうあれだ。あん畜生なんか、一生ずうっと気絶してればいいだ!!」

(那須高原に起ったユーモアたっぷりの事件が、目に映るようです)

うどん

きょうも不猟だった。

ずっと遠く、雪の那須高原で昼のサイレンが鳴った。昼を聞いたら腹がへった。

だが、私は弁当を入れた獲物袋をそっくり忘れてきてしまったのだ。袋の方には用事はないが、弁当は困った。

名犬「大将」がそれと察して、怨みのこもった目で私をにらむのだ。すっかり感情をそこねたらしいやぶの中を、私がガサガサ歩いて雉を探すと、大将はやぶ添いの道をのそのそと、考えごとしながらついてくる。鉄砲は大将に持たせた方がよさそうだ。むかし、大将が若いころ、いい猟犬だった。彼はすばしっこくやぶの中を嗅ぎ廻り、何羽も雉を飛立たせた。私の二連銃が火を吹くと、大将はそのつもりになってかけて行くのだが、雉はどこにも落ちてないのだ。とぼとぼとどつてくる大将 (次号)

鳥居観音だより

終った行事と参拝状況

一月一日 晴

白雲山の大鐘楼から百八の除夜の鐘が、多数の参拝者によって鳴らされ、去年、今年の瞬間から、数時間が経った。

初日に輝き茜色に浮き出た救世観音の姿がはるか四料の地からも遙拝ができた。

新春祈禱十時から尾尻、有馬、鯨井の三老師によつて修行。

来山列席者、川越講原田様の一行、立川の小林様ご家族、飯能平沼玉枝様のご一行、同飯能細田様、水上様、所沢小山様、名栗浅見様、越生平井様等。

山門を入れれば砂利が敷かれた参道で、三三、五五と参拝者が、砂利をふむ音も高く低くきこえた。

一月二日 晴

祈禱の札を配送開始

広瀬秀雄様、江崎元堂様来山、参拝者多し。

一月三日 雲

清水健生様、小山権之丞様、岡部博吉様来山

一月五日 晴

同和講祈禱、青梅小峰久治様、入間市小田様来山

一月六日 晴

入間市吉田健、青梅市富田秋夫、中原昭夫各夫妻

来山、一般参拝多し。

一月七日 晴（寒に入っても暖か）

平沼開祖先生初参拝、庫裡で懇談さる。

一月二十七日 晴

駒込小川勘兵衛様参拝。

二月二日 晴

坂戸市、大竹裕二様外十五名来山

大竹様先祖供養修行

飯能市 島崎石材店より三名入山、松田先生の建

立になる水野梅暁老師の頌徳碑据付、花木の植込み

石の配置等完了。

二月四日 晴

所沢市小山様来山、午後二時より節分法要、

救世大観音、玄奘三蔵塔、本堂と順豆蒔を修行。

二月十日 晴

入山多くなる。自動車の人多い。

二月十一日 晴

本日の来山も多い。

二月十五日 晴

初午、稻荷神社に旗を立て、初午祭執行、

二月十七日 晴

狭山市六本木初代様外来山。

二月二十日 晴

名栗中学三年生、本堂参拝、文庫見学する。

二月二十五日 晴

観光バス三台、来山、江崎様来山。

三月五日 晴

松田江畔先生夫妻清水市から来山。

水野梅暁老師頌徳碑除幕式の打合せをす。

三月七日 雨

浅草、浜田商店より大黒天、三体仏、五具足着荷

三月九日 雨

広瀬秀雄様来山、蹲踞及台石の立札持参奉納、

本堂前に立て周辺の模様一新する。

三月十六日 晴

入間市近藤ハツ様 一万体観音奉安、

観光バス二台来山。

三月二十日

晴 白雲山

の裾の梅の花

が咲いてきた

日野市渡辺

様、三信工業

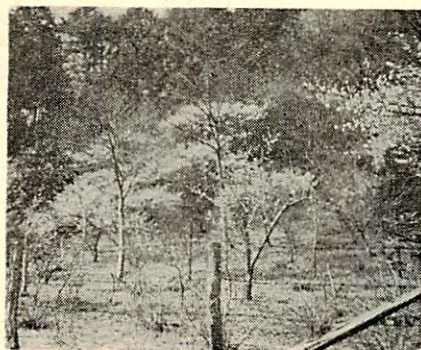
服部社長、埼

玉トヨベツト

平沼社長来山

狭山市山岸武

様祈禱さる。



白雲山の梅花

三月二十一日 晴

春彼岸法要 十時 マイクロバス一台来山。

山上へ浅見案内す。

三月二十七日 晴

秩父市松本忠太郎様来山、東村山市大岡様外参拝

春の団体参拝の打ち合せをいたす。

三月三十日 晴

入山、参拝多くなる。

境内の雪柳や、れんぎょうの花が、咲き出すと、

山内の様子は一変して春を思わせる。

浅春の山々

秩父連峰の

山波、静も

る木々の中

に七つの堂

塔が、物さ

びて鎮もる

のが、又一

入の眺めだ



参拝の一群

四月一日 雨

比企郡川島町 関八郎様心経八十卷納経、

救世大観音前の境内にむらさきつつじが咲きだす

梅花は見頃となった。

四月五日 晴

春休みで来山入山者多く、気候も最高である。

四月十日 晴

保谷市、岡山様来山。三ッ葉つつじ五分咲。

四月十一日

晴 練馬豊

玉、第二町会

長、甲賀様引

卒、案内、平

沼様ご夫妻の

一行百名来山

全山の花と新

緑に目を見張

ってよろこば

れた。



救世大観音前にて平沼開祖ご夫妻

四月十七日 曇

春季例法要、十時本堂、導師尾尻老師、有馬、鯨井兩老師、臨席、開祖平沼先生夫妻、つづく役員

参列、秩父講松本様引卒、埼玉トヨベツト(株)

平沼社長、梶谷副社長、各講演、梅花流詠歌会員、

各講中役員多数の参列があつて開始、

本堂法要十一時終了。

救世大観音法要、十一時三十分。

山内は百花万開 参拝者は列をなし、各堂塔を巡つて参拝され、花など山内を探勝された。

四月二十日 晴 十一時

清水市の松田江畔先生の奉納になる、当山に深いゆかりのある、水野梅暁老師の頌徳碑の除幕式が修行された。

現地は玄奘三蔵塔の前庭で、誰もその広場につくと目につく処である。

紅白の幕をバックに、頌徳碑には白い布がかけられ、前の祭だんには海の幸、山の幸がうつくしく供えられていた。

来賓席に平沼開祖ご夫妻、水野梅暁老師親族多数の列席を得、松田江畔先生を中心とした書道会の関係各位八十名の参列等で式場は一ぱいになった。

式場中央から尾尻導師、鯨井老僧 平野師の入場があつておごそかに修行された。

除幕のひもを松田先生が引かれると碑文は春光に照らし出された。場内から盛んな拍手がわき起つて祝い合つた。

平沼開祖先生の御礼のごあいさつに次いで………水野家を代表されて、水野明さんからもごあいさつがあつて式は無事終了した。

十二時三十分から一同観世音センターの新館で、中食会が開かれ、和氣に満ちた一時を過ぎた。

尚引つづいて松田江畔先生の講演があつて一同、熱心に傾聴された。

その後山内の水野老師の墓参される人、山内を一巡して花を愛でられた人等があつた。

遠く九州、北陸、名古屋、静岡等から来られた方で、すべてが珍らしそうであつた。

来山の人々が、この頌徳碑の前に立って碑文に見

入っておられる姿も、その日午後から見うけられた

除幕せる碑文に見入る春日傘

千昭

施主として始めから、終りまで、ご自分で筆をとられ、石屋に依頼し、一緒に運ばれ、そして式中式後一切を手ぎわよく運ばれ、身心共につくされたことに對し水野梅暁老師はどんなにおよろこびになつてゐるであらう。

頌徳碑は当山に永遠保持されるものである。

松の花頌徳の碑に咲き添うて

千昭

四月二十三日 曇

飯能市 小川文雄様一行、保谷市鈴木様来山、参拝者多数となつて来た。花も見頃となる。

四月三十日 曇

三島市仏教婦人会、バス一台で来山。

東大和市峰岸様一万余観音奉安、福生市福生、

中井様同。

五月一日 晴

平沼開祖ご夫妻来山、山内一巡百花咲きほこる中

を心ゆくまで探勝された。

四十年の歴史の積み重ねの中に、広大な境内と、点在する七堂、花木の生長、あらゆる観音の像が、彫られ、祀られ観音信仰にはゆるぎない存在となつた現実をごらんになって心から満足された。

開扉する恩重堂に風かおる

千昭

五月三日 晴

春の連休だけに、花を見る人、観音参拝の人達で終日にぎわつた。

自動車のナンバーも、埼玉だけでなく、愛知、静岡、神奈川、茨城、東京等のものもあつた。

山から出て来た、一匹猿が山内の道端に座して、来山客からくだものをもらつて、おとなしく食べてゐるのも、たのしい風景だつた。

五月四日 晴

今日も連休の中日、朝から参拝、観光客でたのしいにぎやかさであつた。

五月五日 晴後雨

朝から訪ずれる人と車、花もつつじが満開。

これからの行事

七月十七日

大塔婆施餓鬼供養

東京はお盆なので、午後二時から救世大観音の堂内で、大塔婆施餓鬼供養を修行します。

供養した大塔婆は観音様にまもられながら、堂宇囲りに立てて一年間祀られます。

八月十七日

流灯法要

。花火大会

。盆おどり

(名栗地方は盆です。)

午後四時本

堂で流灯法要

午後六時名

栗川で流灯。



大塔婆供養

本堂の法要が終ると、名栗川に灯ろうが流されま
す。千数百の花模様灯ろうが美観を呈します。



流灯法要の開祖先生

この行事はもう十数年前から行われてきたので、恒例となり、皆様のご協力によりまして年々盛大になります。



名栗川に流灯に見入る人々

名栗地方のお盆は夏休み中なので、他所に嫁に行
った人達が、お子さんを連れて泊りに来るのも丁度
よい機会です。

したがって、当山の流灯法要が呼びものとなって
来ました。

またわざわざ団体予約をして、観世音センターに
泊りがけで流灯に来られる方達もあります。

それらの人達が盆踊りにも参加されるので、当夜
のにぎわいは年に一度のよい慰安会でもあります。

九月二十三日 秋分の日

十時彼岸法要

十月十五日 紅葉狩開始

紅葉は年によって異いますが、そろそろ色づいて
来ます。いろいろな色が濃淡、染め出され、樹令
も経って来たので、素晴らしい色彩りで山をかざり
ます。

十一月十七日 十時三十分

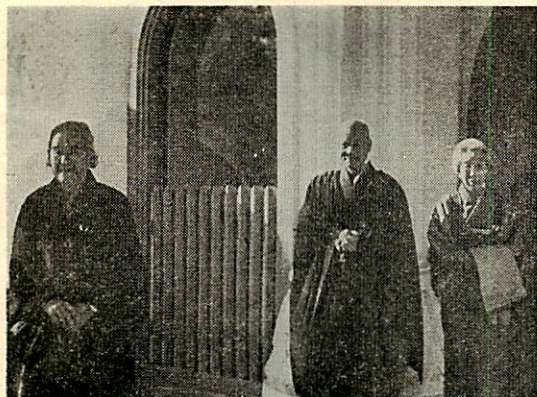
秋季例法要、紅葉が盛りになります。

本堂から救世大観音の順に修行します。

十二月十日 十時三十分 大黒祭

本堂に祀ってあります、大黒様の第一回の祭りを
修行します。福德の歳神として信仰されておりま

十二月三十一日 十一時四十分 除夜の鐘
毎年参拝して鐘をつく信者が多くなりました。



(開祖ご夫妻大観音にて)

開祖ご夫
妻は月例
参拝をさ
れて、山
内をごら
んになる
のがおた
のしみで
す。
春夏秋冬
変る風物
に親しま
れます。

民俗茶ばなし

飯能市 小谷野寛一

お香焼

お焼香の仕方、線香の上げ方は誠にさ
まざままで、なかなか公式が出ない。

「あの人は物を知らない、お焼香を一度でよした」とか、「線香を何本上げた、付けたの離したの」と、なかなかやかましい。得て自己流を固執する。しかし、香は仏に匂いを捧げるもの——という原則を忘れなければ、その場に依じてうまく処理できるはずである。たとえば、部屋中に煙がもうもう立っていたり、焼香の行列が長く続いているような時には、分量や回数を加減して差し支えない。

香ははじめの一つまみを、額のあたりまでいただく人が多いが、あえてしなくてもよいという。二回目のは従香といい、略してもよく、三回目は不要だという人と、三回が正式だが、一回に略してもよいという専門家とある。線香なら本格的には六本だが（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上へのもの）

しかし、一本でよろしいという立場と、二本でも三本でもよいが、離して上げる、という者がある。いずれも権威者の記したものである。

こうなると、どれが正しいといい切れなくなる。そこで一応理屈は知って居て、郷に入ったら郷にしたがうのが賢明ということになるであろう。

如来

最高の仏は「如来」（にょらい）という
しゃか如来、大日如来、薬師如来、あみ
だ如来などと、耳に親しい。

「如来」の意味は「真如より来生せるもの、如来より到来せるもの」と、字面がむずかしい、ともかく、最高の理想的なおすが指す言葉、最もありがたい仏、と解すればよいであろう。

観音さま

地藏様のあとには観音様に出ている
だかないと、同じ慈悲の仏であり、
ともに菩薩の位なので、片手落ちになってはいけない。観音様というと、飯能で育った者なら観音寺と

いえばあのサーカスを思い出す。観音寺のサーカスのジंकが消えて行くと、秋もどつと深まった。

初夏雑詠

観音とは

観音様にいろいろな呼び名があるのはほん語からの訳し方の違いで、観音、観世音、観自在、光世音、観世自在——等、皆同じ意味だという。

観音様とは、世間衆生の音声を観じて（聞いて）これを解脱に導いて下さる仏。言葉を替えれば、世の人の願い事をよく聞いて下さる仏、そして人々に何事もおそれぬ信念と信仰を与えて下さる仏、それ故「施無畏者」ともよばれる。ともかく観音様のお心の底は慈悲（いつくしみ）にあって、地藏とたいへん似ている。

いろいろなお姿を持たれることも地藏と同じで、六観音、三十三観音という言葉があるのも、そのためである。前出如意輪観音とか、馬頭、白衣、千手十一面、子安……等は、人のよく聞くところである。

山門をくぐれば藤の花盛り

松次

山門に発心とあり藤の咲く

正春

山門に入る足音も夏めきぬ

静江

観音のお像に写る青葉かげ

とし子

冷たさをひしゃくにうけぬ寛水

正義

開祖像仰ぐ朝や松の花

倫一郎

玉華門日傘たたみてくぐりけり

千昭

惜春の思い切々さくら散る

忠雄

青葉かげ太き根株の休み台

千昭

青葉かげ陽が廻り来て座を移す

千昭

河鹿なく宿につきけり灯し頃

千昭

河鹿鳴く川瀬に耳を傾けぬ

忠雄

とりぬ 第四十八号 発行日 昭和五十五年六月一五日
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三
印刷所 浦和市仲町二一八—十五 武州印刷株式会社
発行所 鳥居観音 電話 ○四二九七—九—〇四一七

白雲山

鳥居観音
観世者センター
案内図



夏の行事

●大塔婆施餓鬼供養

7月17日 午後 2時

1塔 1,500円以上

別途ご案内申し上げます。

●名栗川流灯供養

8月16日 午後 4時 本堂

6時 流灯

1灯 1,500円

別途ご案内申し上げます。

秋の行事

●秋季例法要

11月17日 10時30分

別途ご案内申し上げます。

紅葉のお知らせ

10月15日から紅葉狩

年々うつくしくなります。